

会報

2018
4
月号
第359号

発行所/岩手医科大学主陸会 〒020-8505 盛岡市内丸19-1 TEL 019-651-5111 FAX 019-624-8380 E-mail info@keiryokai.gr.jp URL http://www.keiryokai.gr.jp
題字/三田定則 先生書 発行人/齋藤和好 編集人/前沢千早 印刷所/山口北州印刷

目次	法人・大学役職者人事……………	1	学術振興会共同研究成果要旨……………	13	歯学部同窓会だより……………	32
	定年退職のご挨拶……………	2	主陸会本部だより……………	20	評議員会・総会・支部長会開催案内	
	教授就任ご挨拶……………	7	代議員会・総会・支部長会開催案内		トピックス・会員だより……………	36
	講座等の組織改編について……………	9	支部だより……………	23	著書紹介・新病院工事状況……………	40
	平成29年度卒業生名簿……………	10	医学部同窓会だより……………	27	大学人事・国試結果……………	41
	本学主催学会開催予定……………	12	評議員会・総会開催案内		お祝い・ご逝去・編集後記……………	42



平成30年2月27日の定年退職となられる先生方の最終講義より、退職のご挨拶は2頁から掲載
写真左から、名取泰博教授、小豆嶋正典教授、杉山 徹教授、谷田達男教授、中村元行教授

■学校法人岩手医科大学・岩手医科大学役職者人事

理事長	小 川 彰 先生(再任) (平成30年2月26日付)
副学長(総務担当)	小 林 誠一郎 先生(再任)
副学長(岩手県こころのケアセンター・岩手看護短期大学担当)	酒 井 明 夫 先生(再任)
副学長(歯学部改革担当)・歯学部長 (口腔医学講座歯科医学教育学分野 教授)	三 浦 廣 行 先生(再任)
薬学部長(病態薬理学講座薬剤治療学分野 教授)	三 部 篤 先生(新任)
附属病院長(脳神経外科学講座 教授)	小笠原 邦 昭 先生(新任)
附属花巻温泉病院長(整形外科科学講座 教授)	一 戸 貞 文 先生(再任)
学生副部長(歯科保存学講座歯周療学分野 教授)	八重柏 隆 先生(新任)
附属病院副院長・歯科医療センター長 (口腔保健育成学講座歯科矯正学分野 教授)	佐 藤 和 朗 先生(新任)
岩手医科大学医療専門学校長(副学長)	三 浦 廣 行 先生(再任) (以上、平成30年4月1日付)



定年退職のご挨拶

平成30年3月31日付

薬学部衛生化学講座 教授 名 取 泰 博

平成30年3月末日をもって岩手医科大学を定年退職することとなりました。平成20年4月に赴任してから10年間、様々な形で圭陵会会員の皆様に大変お世話になったことを心より御礼申し上げます。

私は大学院修了から本学に赴任するまでの27年間を国立の研究機関にて研究者として過ごしましたので、本学には新米の大学教員として参りました。当初は、30年以上前の自分の学生時代と本学薬学部学生の違いに戸惑うことが多々ありましたが、この10年間、数多くの学生達と接し、また様々な状況における彼らの言動を見聞きすることにより、自分なりに彼らの考え方や行動の仕方を把握できるようになったと思っています。

着任時は、大学教員は当然、教育と研究の両方を行うもの、と思っていましたが、実際に学生達と接し、また本薬学部全体の状況を眺めて考えた結果、私は教育に専念すべきとの結論になりました。もちろん講座のスタッフは、彼らの将来のこともありますので、研究にも力を注げるよう、できるだけサポートをしよう、と思いましたが、私自身については、文科省科研費が当たってしまった後の2年間を除き、自分のエネルギーを全て教育に向けてきました。特に低学年の教育こそ大事と考え、大学で薬学を学び、進級して行くことの大変さを身を以て体験させ、学力が不十分な子や、薬学を学ぶ意欲が高くない（親に言われて薬学部に来たなどの）学生に、早めに自分の置かれている状況を理解してもらうことを意識して仕事に励みました。残念ながら毎年、中途退学する学生がいましたが、私が直接に接した学生やその保護者が、少しでも本学に対して良い印象を持って去るよう心がけてきたつも

りです。

本学薬学部の教育・研究の目的は「薬学の進歩と地域医療に貢献できる人材」を輩出することです。昨春、卒業した5期生までで本学薬学部から530名ほどの薬剤師を輩出し、その4割は県内の病院や薬局で働いています。本学附属病院薬剤部ではその半数以上が本学卒業生であり、県立病院全体でも既に4分の1を占めるようになりました。この原稿を書いている時点で今春の卒業生の動向はわかりませんが、おそらく今年も新卒、既卒あわせて100名以上の薬剤師が巣立って行ったことと思います。

私が本学で行ってきたことが、この成果にどれほど貢献したかわかりませんが、少なくとも一部の学生からは心からの謝意を示され、また学生による授業アンケートでは毎年、良い評価を得てきたことから、自己満足とは思いますが、それなりの意味があったと考えています。

本学に赴任するにあたり、私は「貴大学における教育、研究を通して、微力ながら岩手県の発展に貢献したいと考えています。」との抱負を書かせていただきました。また地域に貢献するには腰を据えることが必要と考え、大震災の直前に矢巾の地に居を構えて、地域の人々との交流を行ってきました。本学を退職した後は、自分なりの生き方を考えながら、これまでとは別の方法で岩手県や北東北の発展に貢献していきたいと考えています。10年間本当にありがとうございました。圭陵会の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝をお祈りします。



定年退職のご挨拶 平成30年3月31日付

医学部内科学講座

心血管・腎・内分泌内科分野 教授 中村 元行

昭和46(1971)年に本学医学部に入学し、その後も大学院、関連病院出張、教員と約半世紀の長きにわたり岩手医科大学の下で学び働かせていただきました。この間、学内外の多くの先生方、同僚、後輩、コメディカル、大学関係者さらに地域福祉や予防医学にかかわる方々には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

私は、盛岡に生まれ、叔父や従兄などが本学の卒業生でしたので、比較的身近に岩手医大を感じておりましたが、当時の盛岡人は本学を「医専こ」と称し某国立大学の一段下に見る傾向がありました。そのような中で地元の本学に入学しましたので某大学には負けたくないとの意識が潜在的にすり込まれてありました。さらに、私の学位論文で引用した論文は他施設からのものばかりで、自分たち(旧第二内科)の研究グループのオリジナル業績が全く無いことに落胆したことも覚えております。そのような背景や反省で、学位取得後の関連病院長期出張からの帰学後は、その当時、日本人が構造決定した心臓ホルモン(ANPやBNP)の臨床研究に単独で取り掛かり、「他学に負けないオリジナルな研究」を目指し、CCUのメンバー他の協力を得て心不全や心筋梗塞の患者さんを対象として心臓ホルモンの測定や注入研究を行い学会レベルで発表しておりました。しかし、英文論文の書き方がわからず四苦八苦しておりましたところ、当該分野で活躍していたNZのオタゴ大学クライストチャーチ医学校のA Mark Richards教授に直接手紙を書き留学をお願いしたところ許可を頂き1988年から1年間、同施設の心臓・内分泌内科で勉強する機会を得ました。短い期間でしたが彼らの研究に対する真摯な姿をみて今までの違いを感じました。

その後、本学附属病院において一般検診で異常無であった高校生が心不全で入院してきた例を経験しました。この患者さんの心臓ホルモンの血中濃度を測定すると明かに高い値であったことより検診などでその血中レベルを測定することにより多数例から無症状の早

期心不全を検出できるのではないかと考え、岩手県予防医学協会や東山町(現、一関市)の協力を得て人間ドック受診者や地域住民を対象としてこの仮説が正しいことを検証することができました。さらに、この心臓ホルモン値が高い人が果たしてその後心不全を発症するかについての縦断研究も地域住民約2.6万人を対象とした岩手県北地域コホート研究として学内外の仲間と2002年から取り組む機会を得ることができました。また、血中心臓ホルモン値は心不全だけでなく予後が悪いとされる脳塞栓症の発症予測にも役立つことも報告し、これらの心血管疾患を予防できる可能性を示しました。この県北コホート研究は現在も共同研究者たちにより継続されており、今まで当科医局員の学位論文を含む50篇以上の英文原著が公表されております。

2011年3月に県北コホート研究の対象地域の一部に東日本大震災津波が襲いました。現地の診療体制は混乱を極めました。その実態を明らかにする事は私どもの使命と考え、心不全、心筋梗塞、突然死が津波被害後、最近まで長期間続いていることを明らかにしました。さらに、被災後に国から支援を得て、東日本大震災被災者(RIAS)研究や東北メディカルメガバンク研究など学内外の多くの研究者が参加する大学組織をあげた大型コホート研究が始まり、これらの新しい研究に今まで県北コホート研究で培ったノウハウが生かされる事となりました。私自身は定年となりますが、今まで多くの仲間と共に苦勞して行ってきた仕事がさらに後進の方々に引き継がれ、今後ますます発展することを思うと、望外の喜びと言わざるを得ません。

最後になりますが、世紀の大事業、矢巾新大学病院が隆盛し、わが母校岩手医大が益々発展すること祈り、定年退職の挨拶とさせていただきます。

※参考文献

<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/>

Search PubMed: Nakamura M and Iwate and (natriuretic or earthquake)



定年退職のご挨拶

平成30年3月31日付

医学部産婦人科学講座 教授 杉山 徹

14年と10か月、岩手医科大学産婦人科学講座主任教授の役目をなんとか果たせたこと、伝統ある岩手医科大学圭陵会の先生方に感謝申し上げます。任期中の区切りの出来事3つ、

①癌治療学会理事選挙で理事就任。地方大学の理事はおらず緊張感の中を職務に努めた。理事再任された後より、学術集会長として癌治療学会を開催することを目指した。普通に考えれば弱小教室では無謀なことだろうが、これまで自ら一貫してのがん治療への思いを種々の角度から発信したいという思いがそれに勝った。

②癌治主催の1年前頃にPET/CT検診受け、結果は異状なしとの返事をもたらっていた。しかし、癌治療学会を成功裏に終えた後、病院職場健診の胸写で4cmのmass指摘。精査にて肺がんの診断。夏休みを利用して手術・術後化学療法。

③最後の2年間は附属病院長を拝命させていただき、「管理」のことを学ぶことができた。

①は皆さんに感謝です。②も不幸なことだったけど、一生懸命に医療を提供してくれた、支援してくれた医療者とともに患者に向き合う医療人として大きな財産を得た。

2002年6月赴任。新緑の盛岡、感動したことは、緑の美しさ、「焼いた姫竹とビールがうまい！」しかし、目の前に現れた現実と直面。9人の医局員で大学病院での診療、教育、医局運営が行われている。意識改革も含めて、自ら動き、実践の日々が続いた。当時の9人の侍たちの協力で少しずつ技能・態度は進歩していった。2016年教室統計から、頸がん95例、異型性144例、子宮体がん76例、卵巣がん78例（全国トッ

プレベル)。盛岡の夏は朝早い。最初の4～5年は5時頃から病院に行った。皆が来るまで3時間以上、静かに仕事ができる。次の課題！均てん化が求められる地域関連病院改革へ段階的シフト。実際は集約化なので、ここには大きな痛みを伴った。関係各位の力を得て、大船渡病院拠点化（5人配置）で釜石病院をサテライトとして交代で常勤1人を派遣する。院内助産体制を現場、県とも協議して導入。県北も同様に二戸病院拠点化（5人配置）で久慈病院をサテライト化。久慈病院ではなくて二戸病院を基幹病院にしたのは、応援に行く大学医師の負担を減らす（盛岡～二戸はdoor to doorで1時間）、子育て女性医師でも盛岡から通勤圏ということを優先して断行。そこまで到達した後に3.11津波が沿岸を襲った。沿岸は高台にある大船渡と宮古病院に集約していたので、震災後もほぼ自力で機能できた。大震災ではちょうど教授回診中であつたが、回診後、医局員そのまま土日泊りがけで情報収集を行った。月曜日早朝から現地に向かった。婦人科疾患は待てるけど、お産は待たないだったので。大船渡、宮古の現地からリスクを有する妊婦は大学への搬送を指示・実行した。また、褥婦も難民化しているとのことで、盛岡の開業医の先生方に動いていただき、無料で自院に受け入れていただいた。この取り組みは評価され、遅れて国も動いた。そんな中でも沿岸から歩いて医大まで来た妊婦がいたのには腰が砕けた。盛岡は4か月間の寒い・暗い季節があるが、徐々にその文化に慣れていった。食文化は完全に融合できなかったが、盛岡には美味しい山の幸、海の幸がたくさんあり、季節で楽しめた。ありがとうございました。



定年退職のご挨拶

平成30年3月31日付

歯学部顎顔面再建学講座

歯科放射線学分野 教授 小豆嶋 正典

圭陵会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。私こと、本年3月末日で定年退職をむかえることとなりました。在職中は長きにわたり、圭陵会の諸先生方を始め、各学部の先生や多くの職員の方々に、ご指導、ご鞭撻をいただき感謝しております。

私は1978年に本学歯学部を第8期生として卒業し、歯科放射線学講座に採用していただきましたが、途中医学部の大学院に入学しました。大学院では、当時の生理学第一講座の佐藤誠教授に神経生理学のご指導を頂きました。4年間にわたる生理学講座での研究では、神経伝達物質であるセロトニンとドーパミンに関する電気生理学的な研究を行いました。歯科放射線学分野に移ってからは、滝沢のサイクロトロンセンターや医学部細菌学講座にお世話になり、各種のPET用腫瘍トレーサーを用いた口腔癌のPET診断と培養癌細胞を用いた基礎的な研究をしてまいりました。一連の研究では、圭陵会から助成金や語学士賞などの褒章をいただき、研究活動をサポートして頂いたことに厚く感謝申し上げます。

教育につきましては、これまで30年近く歯科放射線学の学生講義や臨床の指導に携わってまいりました。しかし教授になったあたりから国試合格率が低下するようになり、学問を教えるというより国試合格のための教育が中心となりました。一方で国試出題基準は存在しますが、臨床では使わないような新しい画像診断法が一度国試に出ますと、出題基準の勝手な拡大解釈によりその診断法が問題として散見されるようになり、学生講義で教える内容も国試の回数と共に増やさなければならなくなりました。講義の方略は「スラ

イド+教科書」から「板書」へと変えましたが、ノートを作れない学生が増えてきたため、「書画カメラ+ノート配布」に改善しました。ここ数年はタブレットPCである「iPadをプロジェクターにつなぎスクリーンに投射し、学生配布した資料にiPadを介してタッチペンで書き込む」方法へと進化させました。学生は自分で講義中に書き込んだ資料が「自分へのプレゼント」となり、定期試験での資料として使えるため、このスタイルは好評でした。学生への配布資料はカラーにし、しかも画像写真がきれいに印刷できるコート紙を使用しましたので、少々講座の出費が増えましたが、国試合格率が低下するよりは安いだろうと目をつむりました。他科の先生方もそれぞれ講義方法を改良してきたと思います。最近他大学より成績で劣る入学者が増えてきたのにもかかわらず、最近では国試合格率が全国平均並になったのは、学部全体が危機感を持って教育方法を改善していったことによると思います。歯学部同窓会からは、毎年の業者模試代金の援助や学生のハーバード大学での研修費用の補助など頂いておりますが、やっとその効果が出てきたようで胸をなで下ろしています。

皆様にはこれまでの格別のご支援に深く感謝し、挨拶とさせていただきます。



定年退職のご挨拶 平成30年3月31日付

医学部呼吸器外科学講座 教授 谷田 達 男

平成30年3月31日をもって定年退職するにあたりご挨拶を申し上げます。

私は平成13年4月岩手医科大学第3外科の講座内教授に就任いたしました。就任当時、3名で始まった医局は人事の入れ替わりにより、出口博之、友安信、堀江圭の常勤医4人態勢ができました。その後、重枝弥、兼古由香、菅野紘暢が入局し6人体制となり、医局としての体制が整いました。

平成14年の肺癌手術は46例、呼吸器外科全体で153例でしたが、平成29年では肺癌手術が146例、全体の手術数が290例と順調に増加してきました。当科の手術方法は完全鏡視下手術ですが、いまだに完全鏡視下手術を導入していない病院もある中で、早期に導入できたことが手術症例を増やすことに役立ったと考えています。

平成16年度から初期臨床研修制度が新しい形で開始するにあたり平成14年から臨床研修センター副センター長として研修プログラムの作成、体制整備にあたりました。指導医講習会の主催やタスクフォースとしての参加も業務の一環でした。春は岩手県全体の新研修医オリエンテーション、夏は初期・後期研修医を集めるための東京でのフェアに参加、秋と冬は指導医講習会と盛りだくさんの業務でした。1年次研修医のOSCEは岩手医科大学内で、2年次OSCE（研修医スキルアップセミナー）は岩手県内で全研修医を集めて行っています。本院での初期研修医は毎年20名から2名の幅で増減を繰り返してきました。岩手医大の臨床研修医はよい研修ができないという大学内の偏見の改善に取り組み始めてから徐々に研修医数が安定して集まってきたように思います。今後の研修センターの取り組みを温かく見守っていただきたいと思います。

平成14年4月に電子カルテの原型であるオーダーリングシステム「EGMAIN」が稼働開始しました。平成15年11月から情報センターの副センター長に就任、

注射オーダー、手術オーダーの運用開始に携わりました。オーダーリングシステムの導入後、「手書きにもどせ」、「パソコンが使えないのにこんなものを導入するなんて無茶だ」、「電子カルテにするなら入力する秘書を雇ってくれ」等々の苦情があったことを覚えています。電子カルテ導入に当たり、各科・各部署のヒアリングや設計をどうにかこなし、平成23年2月14日の第1次稼働開始に至りました。しかし、3月11日に発災し、病院の停電回避のために電子カルテはダウンし、停電回復後2～3日で再稼働するという方針のため、かえって大きなトラブルなく5月16日に第2次稼働が終了し電子カルテを導入できました。EGMAIN-GXのレベルアップでも細々としたトラブルは発生しますが、大きな問題には至っていません。平成30年2月11日LIFEMARK-HXがほとんど問題なく稼働開始し、病院移転に向けて大きな山の一つをクリアできたと考えております。

在籍中は山岳部とバレー部の部長に就任しておりました。山に登らない山岳部長、バレーボールを知らないバレー部長で通しました。昔は子供たちとキャンプに出かけたりしたこともありましたが、基本的には外から見守る（飲み会だけ参加）部長で終始しました。最近では年も取ったので2次会は勘弁してもらおうようになりましたが、多くの学生と交流ができ、幸せな17年間でした。

この17年間は医局員や秘書の方々、病棟や外来の看護師、受付事務の方々、薬剤師・放射線技師・検査技師などのメディカルスタッフの皆様、事務の方々に助けていただきながらようやく大過なく過ごせた期間でした。医師臨床研修センターでも電子カルテの運用でも色々な問題を一步一步乗り越えてきたのは参加していただいた多くのスタッフの協力があったからこそでした。皆様に深甚なる感謝の意を表して筆をおきます。ありがとうございました。